

クロエ・ドール

戸森しるこ



絵
吉田尚令

装幀
大岡喜直 (next door design)

一

同じクラスに、貝原かいばら広湖ひろこさんという女子がいる。

貝原かいばらさんは声がすごく小さい。

それに、授業中じゅぎょうちゆうに先生から指名しめされるとき以外は、教室でほとんどしゃべらない。

貝原かいばらさんは、教室でいつもひとりでした。いじめられているのとはちがう。ひとりが好きなのかもしれないなかった。別の次元じげんを生きているような、ふしぎな感じの子なのだ。勉強はよくできるらしかった。先生からの質問しつもんには、ちゃんと答えられた。きれいな子だ。女子のことはよくわからないほくにも、きれいなことがはつきりとわかるくらいに、きれいだ。

目が大きくて、まつげが長く、髪かみの毛もやたら長く、肌はだの色が透すけるように白い。ひよろりとやせていて、腕うでと足がすらりと長く、ちよつと不自然ふぜんなくらいに姿勢しせいがよくて、身長はクラスの女子でいちばん高かった。

でも、笑わなかった。

声をあげて笑うことはもちろん、ほほえむこともしない。みんなが声をあげて笑い出してしまいうくらいに、クラスでおかしなことがあっても、貝原さんだけは、しずかに席に座って、無表情のまま、クラスのざわめきを、じつと受け入れている。ほんとうにふしぎな子だった。

でも、クラスのだれも、その「ふしぎさ」に近づこうとしていけないことが、ぼくにはさらにふしぎだった。

貝原さんは、まるでクラスでいないようにあつかわれている。ふつうはそれをいじめと呼ぶけど、貝原さんの場合はそういうことではなくて、貝原さんが空間にうまくとけこんでいるような感じがする。

存在が浮いているのとけこんでいるって、すごく変なのだ。

うまく言葉で説明できないけれど、そのあたりのことが、ぼくにはとても気になった。

そして、中でも最大級にふしぎなことは、貝原さんがいつも人形をひざにのせて

いることだろう。

持ち物につけるような、小さなサイズの人形ではないんだ。背の高さが二十センチほどもある、学校に持つてくるには明らかに不自然な人形。

さらにふしぎなことに、クラスのだれも、先生でさえ、その人形の存在を無視していた。あのサイズの人形を、先生が注意しないのは、ちよつとおかしい。なにか事情があるのかもしれない。それに、

「貝原さんのあの人形っていったい……」

といううわさ話を、ぼくはきいたことがない。五年になってぼくがこの学校に転校してきてから、ただの一度もないのだ。

だれもが、ぼくと同じように思っているのかもしれない。でも、そのことを口に出してはいけないような、みょうな圧力がある。すごく変だ。

なにかの魔法……？ ぼくはちよつとだけ、そう信じかけていた。

その人形は洋風の人形で、頭のサイズが全体の三分の一くらいあった。三頭身だ。目が大きく、まつげが長く、髪が長く、色白で……。